

大塚明夫の

声優塾

大塚明夫

「いやあ、上手だね…。こういう人が深夜のアニメに出て、そしてどんどん

消えていくんだ」

それでも諦められない奴へ

大塚明夫が本気の声優志願者たちと繰り広げた180分の真剣勝負を1冊に!!



大塚明夫の声優塾

大塚明夫

星海社

83





2015年9月末、星海社のWebサイト「ジセダイ」上に、こんな告知が出ました。

来月徳島で開催されるイベント「マチ★アソビ」に、大塚明夫さんがいらっしやいます！

そして、ここでしか聴けない、もしかしたら二度と聴けない、特別講義を実施して頂きます。参加条件は「本気で声優になりたい人」。これさえ満たせば、年齢性別は問いません。ただし、「本気の人」を選別するため、宿題を出します。また、授業料5000円を頂きます。

当日は、みなさんにご提出頂いた宿題を題材に、大塚さんご本人から、具体的な「生存戦略」を御指南頂きます。手加減は一切ありませんのでともしれば「やめたほうがいい」と言われることもあるでしょう。その覚悟がある方だけ、お越しく下さい。今回ばかりは、半端な方のご参加はご遠慮頂きたいと思っております。

## 【宿題】

1 大塚明夫著、星海社新書『声優魂』の熟読

2 申し込み者のみに発送される「とある原稿（4000字程度）」を熟読のうえ、登場人物の心情・人物像を想定し、その理由を含め作文

3 申し込み者自身が上記「とある原稿」のキャラクターを演じた（男性は男性キャラを、女性は女性キャラを）、音声ファイルの作成

定員は20人。

その席は、告知開始から24時間を持たずに埋まりました。

一夜限り、本気の人たちだけを集めた「大塚明夫の声優塾」。

唯一無二の声優、大塚明夫本人が、全国から集まった16人の生徒と対峙したその貴重な記録を、一冊に凝縮したのが本書です。

本書は、さまざまな読み方が可能です。

声優を志す方はもちろん、俳優、ミュージシャン、アーティストなど、芸の道を志すすべての人にとって、本書は実践的な演技・役者論の本として読んでいただくことができます。アニメファンの方が読めば、声優の演技や演出の意図について理解が進み、作品をより深く洞察どうさつすることができるようになるでしょう。

大志を抱くも往く道に悩む、ビジネススマンにもおすすめます。正しい目標の立て方、また、そこへと近づく戦略的手法について、声優業界の事例をもとに考えることができます。

なお、生徒の方々に特別に許可をいただき、提出された音源をそのまま聞けるよう、本文中にQRコードを配置させていただきました。スマートフォンで音源を聞きながらお読みいただくと、より忠実に、授業を体験していただくことができます。

さあ、そろそろ、授業がはじまる時間です。

どうぞ、授業を受けている生徒のひとりになったつもりで、ページをすすめてください。

「大塚明夫の声優塾」、スタートです。

一  
限  
目

# 声優にとっての本気・技術・感性

他の「山」全てを捨てる覚悟があるか 10

業界ナンバーワンの声優って誰？ 18

君は「ド」の音が瞬時に出せるか 22

注文に応え続け、注文に飽きる役者の業 27

読書を繰り返して「キャッチする力」を養え 33

アニメしか見ない人間に、表現の幅は作れない 64



二  
限  
目

芝居の基本はセリフにあり

87

オーディションでインパクトを残すために 89

「楽な音」のパターンにハマるな 99

声優生存戦略コラム② 確率を高める戦略と、ヒマな時間の使い方 120

120

三  
限  
目

上手な素人から抜け出せない声優の卵たちへ

文章に書かれていないものを読む 126

深夜アニメに出て、すぐに消えていく人たち 137

「愛嬌」は最大の武器である 145

「量産型」にならないために、全てを忘れろ

153

声優生存戦略コラム③ 映像言語を学ぼう！

170

四限目

夢中で進み、自問せよ

177

あとがきにかえて

185



一  
限  
目

声優にとつての

本気・技術

感性

## 他の「山」全てを捨てる覚悟があるか

どの街にもあるような、ありふれた会議室の一室だ。そっけない長机とパイプ椅子。15人の若者が、緊張と期待の面持ちでそこに着席している。大学の、定員の少ない講義のような光景。生徒たちの見つめる先には、壁を背に座る二人の男がいる。声優・大塚明夫と、彼が所属する声優事務所マウスプロモーションの社長、納谷僚介。少し離れた場所に、星海社の編集者が控える。これから始まるのは、彼らによる「本気」の授業。声優としての生存戦略を説く、一日限りの「声優塾」である。

大塚　こんにちは。声優の大塚明夫です。お集まりいただきありがとうございます。今日ここに来てくれた君たちはきっと、私に当たり障りのないコメントなんて望んでいない、本気の人たちでしょう。だから今日は、私の方も君たちを自分の本当の後輩だと考えて、心からものを言うつもりです。傷ついたらごめんね。

納谷 どうも。声優事務所、マウスプロモーション社長の納谷僚介です。今日は、本気で声優を目指す人を対象に、声優として生きていくための心構えや技術面についてお話していきます。よろしく願います。

生徒 よろしく願います！

納谷 と、その前に、ひとつはつきりさせておきたいことがあるんですよ。大塚さん、「本気」ってどういうことだと思います？

大塚 前著の『声優魂』にも書いたけど、演じる道を選ぶというのは、「生き方を決める」ことなんです。どういうきっかけで役者をやってみたいと思ったか、声優になりたいと思ったのかは関係ない。この道に「本気」で一步でも踏み込んでしまったら、残る人生の選択肢は激減します。ここについては、私はきっぱり断言することができます。そのことを真の意味で許容しているのか、その道を進む覚悟はあるのかという話です。

しかし、今日ここに来ている人たちは、そのあたりは多少わかっているんじゃないかな。

全員、『声優魂』を課題本として読んできているんだから。

そう、今回の声優塾の課題のひとつめは、「大塚明夫著、星海社新書『声優魂』の熟読」であつた。しかし——。

納谷 今回の塾は、20人限定で募集をかけました。告知した途端、あつという間に満員御礼になった。でも実際に今ここにいるのは15人なんですよね。5人も辞退者がいたわけです。その理由をメールで送ってくれた人がいて、そこには『声優魂』を読み返して、自分が本気でないことに気づいた」なんてことが書かれていたんです。応募まではしたのに、そこから引き返しちゃった。

大塚 それはそれは（笑）。よかつたんじゃない？ 事前に気づいて。

納谷 そうですね。でもちょっと悲しい気分になりましたね。だから今、ここに来てくれた人については、それだけで既に1回褒めてもいいと思つているんですけど。

大塚 何かに挑戦すること自体を、「本気」という言葉を理由にやめてしまうのはもったいないかもしれない。

たとえば声優の専門学校もそうです。今日来ている人たちの中にも、声優の学校に通っている人はたくさんいるでしょう。時々誤解されているみたいなんですけど、私は『声優魂』の中で「声優学校に入るのはよくない」って言ったつもりはないんだよ。なぜならば、しよせんは学校だから。通うのなら、楽しんで通えばいい。学校に入ると、同じような年代に生まれた人たちが同期生になる場所が急に生まれる。志を持った人間同士がめぐり合う機会としては素敵だね。だからそれをやめなさいとは言いません。青春の楽しい思い出にもなるでしょう。ただ私としては、その先のこととか、親御さんの負担が気になるわけです。

年齢的に言うと、私は君たちの親御さんと同じ世代なんです。声優学校の学費ぶんのお金を稼ぐというのがどういうことか、私にはよくわかる。君たちにはまだわからないと思うけど、それって大変なことなんですよ。一度でいいから、親御さんの気持ちになってみてほしいね（笑）。

もちろん一方で、「息子や娘がやりたいと言うんだから、やらせてやりたい」という親心もわからないわけではなくてね。子どものために一生懸命頑張ってなんとかお金をひねり出して……。そういうのは、やっぱり親の性でもある。そこを含めてまず、今声優学校に通っている人は親御さんに感謝した方がいいよ。

そして、やっぱり入った後のことも、考えられる範囲で考えるべきではあるんです。親御さんにそれだけの切ない思いをさせてしまった上で声優学校に入学して、「やっぱり俺には向いてないんじゃないか」「私には無理かも」って悩んでいるときにふっと彼氏や彼女ができて、それで「自分にはこの人がいるからもういいや」ってやめてしまう人が学校にはいくらでもいる。あるいは、そんなふうには仲間同士でひつついた後に、結局は別れてしまつて「俺の恋も終わってしまったし、声優の道も諦めよう」なんて思うこともあるでしょう。学校つてのはそういう場所でもある。

そこで踏ん張つて、どうやつて人生を生きていこうかと苦悩して、その結果「私にはこれしかない」と思いきつたそのとき、「本気」の本当の第一歩を踏み出すのかもしれないね。そこからの話を、今日私ははしたいと思つている。そうでないところについて語るのは、学校の人たちに任せるよ。



納谷 今って、「本気」であるということがすごく稀有けつな時代だと思うんです。なかなか本気な人に出会えない時代というか。正直な話、みなさんが本当に本気なのか、今の時点では僕たちも超能力者ではないのでわかりません。でも、今日だけはそのつもりでしゃべろうと思ってます。なので、さつきも大塚さんが言いましたけど、僕たちはこれから厳しいこと、辛辣しんらつなこと、酷いことをみなさんに言うかもしれない。いや、言います。でも、それはみなさんを傷つけないからではありません。それが僕たちなりの、みなさんの「本気」に対する答えなんです。それはご理解ください。

「お前たちが『本気』であることを前提としてしゃべる」——二人のその前置きに、15名の生徒の背が心なしか伸びた。

納谷 それでは、具体的な話をしていきたいと思いますか。

ここに集まったみなさんは、声優さんや役者さんになりたい人ですね。声優さんや役者さんになって「売りたい」、「生き残りたい」という願望を果たすためには、当たり前前の話

ですが仕事のある状態にならないといけません。

声優さんを職業にしている人は、いっぱいいます。今の声優業界ですと、2500という人もいるし、3000という人もいるし、10000という人もいます。要はどのレベルからその人を声優だと認めるかという話なので、数字をとやかく言うことには意味がないんですが、とにかく大勢なんです。

ただし、その世間にはいろいろな声優さんの中にはひとつだけ明確な区別があります。わかりやすく言ってしまうと「売れている人」と「売れていない人」。みなさんは「売れている人」になりたいですよ。大塚さん、そもそも、「売れている人」ってどんな人だと思いますか？

大塚 要は出演オファーが多いうってことだよ。オファーが多いうってことが報酬に直結するんだから。

ただ人によっては、例えば一本だけでもいいからヒットゲームの主人公になって、イベントにたくさん出て、人気者になって……というのも「売れている人」には違いないと考えると思う。だから何をもって「売れている人」とするか、その基準を明確にするのは非

常に難しい。私のように一度もアイドル的存在になつたことがないままに、いつの間にかここまで生き延びてきているというケースもあるわけで。そうかと思えば、かつては一世を風靡したけども、今は……という声優もいる。

私も、一世を風靡した人も、どちらも「売れた」と言おうと思えば言える。数字的にどつちのほう売れたのかと言つたら、後者のほうが刹那的ではあつても売れたのかもしれない。

あるいは、その人はもう業界にはいなくて、私は未だに細々と飯を食つていてという意味で、「大塚のほうが長く売れている」と言うこともできるかもしれない。そこにどんな差を感じるかは、その人しだいだと私は思う。

だから一つ言えるのは、売れ方としてみなさんが何をどう望むかということ、できるだけ早いうちに自分ではっきり把握しておけということです。そうでないと、人生において無駄な戦いを延々と続けることになる。そこについては、ぜひ自問自答してほしい。

生徒たち はい！

生徒たち全員が、目を輝かせて声をあげる。彼らのほとんどが、自分こそは本気であり、覚悟ができていると思っている。しかし、その「本気」が問われるのはもっと先のことである。

### 業界ナンバーワンの声優って誰？

納谷 「売れている人」「売れていない人」の違いがある、というお話をしましたが、一方でこの業界って、「いちばん」は決まってるんですよね。

僕はよく、うちの事務所の若い子に「ナンバーワンの声優って誰だと思う？」って聞くんですよ。そうすると、色んな答えが返ってきます。

山寺宏一やまてらひろいち、よく出ます。大塚明夫、よく出ます。人によっては、沢城みゆきさわしろって人もいます。水樹奈々みづき ななって人もいます。大木民夫おおき たみおというのでも聞いたことがあります。「じゃあ本当のいちばんは誰なんですか？」っていうのがみなさんは気になるかもしれないけど、それでナンセンスな質問で、ぜんぶ正解だと思っんですよ。その人にとって1番であるならば。つまり、まずは声優として「どこ」を指すのかっていうのがとても大事なんです。そ

こが決まれば、逆算して戦略を立てることができます。

ツリー構造ってわかりますかね？　ひとつの地点からスタートして、どんどん枝分かれしていく構造。雑誌の心理テスト記事なんかにもありますよね。ひとつの質問にイエス・ノーで答えて、どんどん分岐して行って、最後に「あなたはAタイプです!」とか出るやつ。

声優さんの世界っていうのも、実はちょっとこういう構造に近いものがあるんです。行き先がいっぱい、木の枝のように広がっている。出発点はみんな一緒です。「質問1　あなたは声優になりたいですか?」、イエス!　そして次に進むと「質問2　声優学校に行きますか?」。うーん、それよりは直接録音データを声優事務所を持ち込んだ方がいいんじゃないか、ということでもノー……とまあこんな感じで進んでいくわけです。

途中までは、それぞれのルートを行き来できる。でも先に進んでいくと、それができなくなるんです。タイプAのルートに入ったら、その一群の中の到達点を目指さなきゃいけない。いきなりタイプBという結果には飛べないんです。ある程度から先は、なんともいいますかね、たとえば言うなら山登りかな。同時に二つの山は登れないでしょう。

大塚 一言で声優といってもいろんなタイプがいるからね。可愛らしさを活かしてアイドルのように活動する子もいれば、洋画をホームにする人間もいる。ある程度「売れている」領域までたどり着いたら、それぞれの山を登らなければいけない。

納谷 そうなんです。「芝居ができる人」っていう山だったり、「ナレーションができる人」っていう山だったり、実はいろんな山があるんですよ。大塚さんの言葉を借りれば、「細々とでも長く活躍できる」というのもある種の山だし。そしてその山は、たとえば「武道館をいっぱいにするようなメジャー級の人気を得る」という山と一緒に登ることはできないんです。それなりにオファーが来る、職業声優として通用するぞ、という段階までたどる道はみんな一緒なんだけど、途中からどうしたって「この路線でいく」というところは考えなきゃいけない。

今回の塾の開催にあたり、僕は「本気」って言葉についてすごく考えました。そして、人が「本気」を問われるタイミングとして、この分岐地点はとても大きいと思うんです。本気って、簡単に言うとか何を捨てることなんですよ。

例えば「アイドル的に売りたい」「武道館をいっぱいにしたい」という目標を叶えるのであれば、二度とはこない、人生の貴重な若い時間を猛烈に割かないといけません。普通の高校生活をエンジョイしながら、そのレベルの人気を得ようたって絶対無理です。それだけじゃありません。たとえその目標を達成したとしても、アイドル系声優というのは、演技の評価という意味では実力より軽く見られる可能性も高いわけです。そう考えると、「アイドル的に売れる」というのは、中年になっても長く活躍する道を閉ざす損な選択なのかもしれない。それでも、その道を進むことができるのか。

はつきり言いますね。声優という道、役者という道を選ぶということ自体が、イコール、楽しい人生とか人並みの生き方というものを捨てなければいけないということなんです。

大塚 歌手の美空ひばりさんはね、離婚したときに「スターが幸せになれるわけじゃないじゃない」と言ったらしい。そのエピソードを聞いたとき、彼女はやっぱりすごい人なんだなと思いました。彼女が言いたかったのはたぶん、いろんなものを犠牲にしないと、スターと呼ばれるようなレベルまでは到底たどり着けないということだと思っんです。大事なものを捨てなければたどり着けない境地は、私もやはりあると思うよ。

君は「ド」の音が瞬時に出せるか

大塚 売れる売れないっていうのは、はつきり言って「運」です。これはみなさん、『声優魂』を読んでくれているから、わかってるよね。

生徒たち はい。

大塚 正直言って、下手でも売れている人はいます。ただそういう人は、下手でも何か持っている。売れる要素をね。

例えばデジタルがかわいとか、かっこいいとか。イベントに行けば必ずみんなを盛り上げることができる、天性のエンターテイナーだとか。そういう有形無形の武器も含めて、トータルで力があれば、声優としての技術がそんなになくても売れることは可能なんです。

そして今、勘のいい人は気付いたかもしれないけど、売れている人が持っている「何か」



は、努力しても手に入らないものが多いんだよね。例えば「顔」なんかは、その典型。私なんかは今でこそ「渋い」と言っていたことがあられるけれど、見ての通りイケメンにはほど遠い。これはもう、どうしようもない。可哀想だけど。でも、技術なら磨くことができる。技術は唯一、伸ばすことができる「売れる要素」なんです。

納谷 声優にとっての確かな「技術」って何ですかね？

大塚 簡単だよ。「ド」の音を出そうと思ったときに、正確にドの音が出せるかどうか、それだけ。自分のイメージを、そのイメージ通りに音にできる。この、音にできる力というのが「技術」です。自分で「こういうふうにやりたい」と思ったことができなければ、それはすなわち技術がないということ。この音づくりが苦もなくてできるようになってようやく、見せ方というものに考えが及ぶようになるんです。

我々声優、役者は、ある意味ではスタジオミュージシャンと呼ばれる人たちに似ています。レコーディングという目的のもと、その日集まったメンバーで、当日もらった譜面を即座に読み込み、プロの技術に裏打ちされた音を出す。簡単な例だと、こうです。

〈録音前日〉

「あの人はうまいから、あの人にギターを頼もう」

「はいわかりました」

〈録音当日〉

「これが譜面です」

「はいわかりました」

我々の仕事もこれと同じ。基本的には淡々としている。収録が終わったら、「ありがとうございました」とギャラをもらって解散するだけ。この繰り返しというのは、やっぱり技術がないとできない。

ディレクターから「そこでその音を使うと見せ方が変わっちゃうので、ちょっと違う音にしてください」と言われたときに、コードを意図的に変えていくことができなかったら、技術があるとは言えないよね。かつ、スタジオオミュージシャンだから、気の合う仲間と情

熱を持ってバンドを組んで仲良くやってバーンと売れる、なんてこともないんです。

確かに、昨今の声優の世界では、アイドル性も要求されるようになってきました。昔とだいぶ様相が変わってきたのは事実です。でも基本の部分は変わっていません。声優の世界の基本は技術。そして技術というのは、繰り返しになるけど、「思った音を出せる」ということに他ならない。

例えば先日私がやったのは、プレイステーション4の新作ゲームタイトルを一気に紹介するCMの仕事でした。これは技術でやった仕事です。芝居ではない。ゲームの雰囲気に応じて音色を変え、喋り方を変え、空気から変える。私にはそれができる。しかしこれは、ただの技術です。私の魂から絞り出した言葉ではない。相手役もないし、シチュエーションもないし、ただいろんな音を出したっていうだけの話。しかし技術があると、こういう仕事が確実に来ます。

そういう意味でも、プロとして生き残るためには、技術を身につけたほうがいいに決まっています。

それを持たずして、時には鍛える暇もないぐらいの勢いでアイドルになったりすることももちろんある。でもね、そうすると、その後業界という戦場で生き残っていくのが大変

難しいことになる。だから技術はあったほうがいいと私は思う。

声優としての技術を駆使するためには、その人独自のソフトが必要になってきます。一瞬先の未来を察知する能力、相手の情報をキャッチする能力。相手の芝居がどんな芝居なのか、相手がどこにしているのか。怒っているのか喜んでいるのか、悲しんでいるのか。そういうものを汲み取る力。これがあって初めて技術が生きてくるんです。

今回、君たちには事前に課題を渡しました。わかっていると思うけど、この課題は、君たちのその技術力を把握するために出したものです。

大塚明夫の声優塾、第二の受講資格は、「申し込み者のみに発送される『とある原稿（４０００字程度）』を熟読のうえ、登場人物の心情・人物像を想定し、その理由を含め作文。同原稿の一部を読み上げた音源と一緒に事務局宛に送付する」というものであった。

大塚 ひとりひとりから提出された作文が、今私の手元にあります。ざっと拝見したところ、みんなそれぞれの役に対して、それなりの分析をしてくれています。けっこう核心を突いているものもある。唯一の「正解」なんてないけれど、でも大体こうだよね、こうい

うことだよね、つていうところを君たちはちゃんと理解していると感じました。

でも、じゃあ実際の演技はどうか。実際にみなさんに吹き込んでもらった声を聞いてみると、「ん？」となる。なぜか。イメージした通りの音が、出せていないからです。技術が追いついていない。これは非常にもつたいたいことであるとも言えます。

もちろん、今回の課題で私たちが見ようとしているのは「技術」だけではない。この課題の軸は「芝居」です。さっき私が言った、プレイステーション4のCMは「技術」の仕事。技術があれば芝居ができるのかというそれは違う。セリフを言うっていうのは、原稿を読むのとは全く違います。まず、自分から発信しなければならぬ、そして人が発信したものをキャッチできなければならぬ。それがあって初めて「掛け合い」になるし、初めて「芝居」になるんです。のつけから難しいことを言っただけで、今日は本気で行く決めているからね。

### 注文中に込め続け、注文中に飽きる役者の業

納谷 いやはや、本当に難しいこと言ってますよ。大塚さん、今日の塾、ホントに本気で

すね。

大塚 うん。最初にそう言ったじゃない。

納谷 「このレベルの話をするのか……！」と思いました。どうということかと言うとね、僕たちマネージャーや音響監督からすると、「注文通り」ができる役者というのはものすごく貴重なんです。台本に書かれた文章を正しく読み取って、このキャラクターにどんな味付けが必要か、他でもない自分が呼ばれたということはどんな演技が求められているのか、が瞬時にわかる人。

大塚 最大公約数をサッと読める人ですな。

納谷 そうです。僕は作品の制作サイドに関わることもありますが、どちらかという事務所側の人間なので、そういう能力がある人をまずは「使える」人、「上手い」人として評価します。今はまだ全く売れていない子、誰も知らない子っていうレベルの人を鍛えて「知

っている人は知っている」というレベルにまで持ち上げるのが、マネージャー、そして音響監督としての僕の最初の仕事です。

大塚 仕事でもあり、楽しみでもある。

納谷 もはや趣味でもあるかもしれない(笑)。でね、「まだこれからだ」という人を鍛えんとするときに、そういった「他者からの注文、情報発信を的確にキャッチする力」があると大助かりなんです。そういう人は、「現場でとりあえず使ってもらえる」レベルまで引き上げやすい。

逆にその力がない人というのは、「このシチュエーションだったらどう考えたって笑うだろう」っていうところで、平気で泣くんです。極端に言うところ、だから役者を志す人ならば、まずはその「人が発信したものをキャッチする力」を、ある程度発揮できるようにしないとけません。それを願って、この課題を出しました。

大塚 ただ、ここにもまたひとつ難しいポイントがあつてね。最大公約数を見破って注文

に的確に返すという、そのレベルだけでずっと仕事をしていると、いつかは飽きてしまう。嫌になってしまふんです。仕事が「ただこなすだけのもの」になって、つまらなくなっていくわけ。

私を含め、芝居の世界で何十年も生き残っている人は、実はその先で勝負をしているんです。それが大変過ぎて嫌だという人はどこかで逃げたり、別の道に転身したりする。でも、できれば君たちにはそういう大変な勝負をし続けてほしい。そうしたら絶対に飽きることはない。なぜなら、ゴールがないことそのものを楽しめるから。でも人間って、飽きたらすぐにも嫌になっちゃうからね。

納谷 うーん、その段階の話をしちゃいますか。

大塚 もちろんするよ。フッフ。

納谷 だったら僕も踏み込みましょう。あのですね、さっき僕の言った、「他者の注文を的確にキャッチできる人」というのは、大塚さんレベルの世界では全然「上手い」方に入り



ません。まったくその域には達さないです。もっともっと手前の段階での話ですから。

大塚さんのおっしゃった通り、僕の言った「上手い」レベルまで到達した人は、そのままでいるとやがて飽きて、仕事をつまらないと思いはじめます。「これが最大公約数で正解でしょ」という気持ちで演じるってことは、そこに自分の意図だったり考えだったり、いろんな「自分はこうしたい」という創造的な気持ちが含まれなくなるということですから。それは「正解を提案する行為」ではあるけど、つまらないのは当然だし、つまらないってことはどこか間違ってもいるんですね。僕は声優全員がそんなに機械的に演じているとは思いませんけど、上手くなればどうしても、ある程度の演技は「作業」になっていくものなんです。上手いがゆえに、手癖で仕事できるようになってしまふ。でもそうすると、他人はおろか、自分ですら感動しない演技になる恐れがあります。

だから実は、一線級の声優でも、別の角度から見たときには下手、ということもあるんです。僕から見たら「上手くなってきたなあ」と思える子が、大塚さんから見ると「あいつ、つまんなくなつたな」となることはいくらでもあるし、それは矛盾していません。見るフェーズの違いによるものなので。

じゃあ、今ここにいるみなさんがまずどこを目指すのかという話になると、これが難し

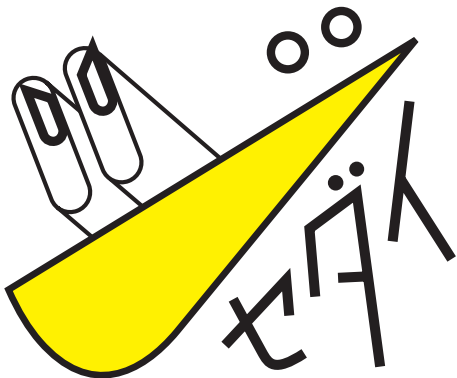
いんですよ。大塚さんの言っていることはストイックですごいし、正しいんだけど、役者を使う側から言わせれば、「お前の主張はこうかもしれないけど、音響監督さんが要求するのはこうでしょ」と、どうしても言いたくなる。

そのとき、「いや、それだと自分、物足りないです」なんて言われると、役者を使う側とすればすぐくめんどくさい（笑）。大塚さんのレベルを目指すのは本当に難しいことなんです。

大塚 それは、さらに上を行って見せないことなんてことなんだよ。相手の示したルートに、ある意味従わずに進むからには、より遠くに行つて見せない筋が通らない。そこに常に挑み続けることが醍醐味なわけです。

今日は、みなさんにそれを押しつけることはしません。ただ、そういう世界があることは知っておいてほしい。その上で、それでもやっぱり、技術から身につけていこうという話になるわけなので。まあ、私の話を聞いたからといって、それだけで技術がつくわけじゃないですがね。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**